



2010年(平成22年)
8月号(No. 783)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

53 泊の雪洞滞在、	1
83 日間におよんだハンター冬季単独挑戦	1
新公益法人問題について思う・・・	3
「森づくり活動の基本ルール」を読んで・・・	4
日本山岳会の将来の姿を思う 会員数の	
激減をどう食い止めたらいいか・・・	5
田淵行男の著作と本づくり・・・	6
東西南北・・・	8
昭和天皇、皇太子時代の富士登山	
ヒマラヤ文献の古典	
国土地理院でのサプライズ	
活動報告・・・	10
自然保護委員会／集会委員会	
支部だより・・・	12
青森支部／山梨支部	
英文ジャーナル 2010年第11号発行・・・	13
図書紹介・・・	14
会務報告・・・	16
ルーム日誌・・・	18
会員異動・・・	18
新入会員・・・	18
図書受入報告・・・	18
INFORMATION	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・10～20時
水・金・・・13～20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10～18時

53 泊の雪洞滞在、 83 日間におよんだハンター冬季単独挑戦

栗秋正寿

マツキンリー、フォラカーの冬季単独登頂を成功させている栗秋さんは、最後の課題であるハンターに挑んで5年になります。北極圏特有のブリザードが吹き荒れる劣悪な条件のもとで、雪洞で好天を待ちながらの挑戦は想像を絶するものがあります。今年のアタックの様相を綴ってもらいました。

2010年2月24日午前4時。
ハンター(4442^{メートル})西稜に設けたキャンプ4(C4、3230^{メートル})。未完成の雪洞のなかの気温は零下20度。寝袋にもぐり込んでウトウトしていたが、口もとに吹き込んでくる雪の冷たさに目を覚ました。

前日の午前、C3(3100

メートル)からC4に移動。午後、雪洞掘りに取りかかったが、あまりにも雪が硬く、ピッケルで深さ80センチの横穴を削るのが精一杯だった。やむを得ず、その小さな穴に上半身を押し込み、下半身はツェルトで覆った状態で一夜を凌いだ。起床後、再び雪を削る作業を続けた。夕方になってようやく量1

枚ほどの寝床を確保することができた。入山56日目にして、最も厳しいビバークを強いられたが、「頂上に立ちたい」という意志は揺るがなかった。

5度目のハンター挑戦

中央アラスカ山脈三大高峰の冬季単独行に挑戦して12年。98年にマツキンリー(6194^{メートル})、ウェストバットレス、07年にフォラカー(5304^{メートル})、南東稜を極めたが、残る課題のハンター(西稜)はいずれも敗退した。昨年は8度目のラッセルの末、C2予定地(2600^{メートル})までルートを延ばしたものの、その翌日から天候悪化。C1(2020^{メートル})のテントに15日間閉じ込められ断念した。そして今回、5度目の挑戦となる。

09年12月30日、山麓の町タルキートナから約100キロ離れたカヒルトナ氷河のベースキャンプ(BC、2130^{メートル})に小型機で向かった。BCに持ち込んだ荷物の重さは約150キロ。日照時間が4時間半と短いため、行動できる時間も制限される。冬のアラスカ山脈は、北極圏特有のブリザード(暴風雪)が何日も吹き荒れ、登頂困難な山に一変する。長引く停滞に対処し、より安全を期すため、今回もカプセルスタイルを用いた。翌31日、荷上げ開始。BCから4・8キロ離れたC1(2130^{メートル})までスキーを履き、ソリを引いて氷河を往復する。長さ4・2メートルのポールを腰の左右に装着して、クレーバス転落防止に努めた。好天を見計らい計4往復して、10年1月



ハンターの全容と西稜(中央)、今回のルートを示す

9日、C1にテントを設営。

ここから、標高差2300^{メートル}、全長約7・2^{キロ}の西稜(北西支稜)がハンター山頂へと延びている。傾斜40度から60度、一部に70度ある尾根に取り付いて、北西支稜の中間に位置するC2(2620^{メートル})を目指す。膝から腰の深さまであるザラメ雪と格闘しながら、ルートワークと荷上げに計9日を費やし、1月23日、C2に移動。テントは風で飛ばされやすいので、ここからはすべて雪洞を利用した。

C2から西稜主稜との合流地点にあたるC3を目指す。厳しいラッセルが続くなか、傾斜60度から70度のガリーに長さ60^{メートル}のロープ3本を設置し、北西支稜を突破。

ルートワークと荷上げに計7日を要して、2月4日、C3に移動。こまでは比較的天候に恵まれたが、翌日から大荒れとなり、計15日間の足どめをくらった。C3の雪洞でひとり、雪を解かして水を作り、炊事や食事をし、除雪や気象情報をチェックするなど日課をこなしながら、ラジオ(31局も入る!)を聴いたり、日本にいる家族のことを想いつつ、停滞の日々を過ごした。

C3からは、雪庇とクレバスの並行して走る尾根を登り下りしながら進むと、頂上へ続く大斜面の基部にあたるC4に至る。荒天の合間を縫って3往復し、3週間分の食料と燃料を荷上げた。順調にいけば、もうひとつ先に最終キャンプ(C5)を設け、そこから頂上にアタックする計画だった。しかし、C4に入った後も天候は芳しくなく、再び雪洞に釘付けにされた。日ごとに減っていく食料と燃料を前に、C5を設けず、C4から直接アタックすることも思案した。

天候に見放され敗退

3月5日、C4滞在11日目、入



C3の雪洞にて、ここには計23泊した

山66日目。夜になつても地吹雪が収まる気配はなく、寝袋のなかで自問自答した。これだけ天候に見放されると、今回もまたダメか。頂上を狙える所にいるだけに、残念でならない。だが、何はともあれ、生還が最優先。命あつての物種だ。明日も動けないなら、そろそろ潮時だろう。

翌6日も地吹雪。この日も身動きが取れず、日程の遅れと残りの食料などを考えて下山を決意した。翌7日、風が弱まったのを見計らって、氷壁直下(3300^{メートル})に設置していたデポを回収したものの、それから3日間、再び地吹雪につかまってしまった。

11日、16日間過ごしたC4を後

にし、C3に戻った。ところが、C3から荷下げを始めて数日で天気が好転した。「この好天がもう数日早かったら登れたのに」という思いもあったが、この好天があったからこそ無事に下ることができたのだ。

22日、BCに戻り、タルキートナに下山。最高到達点は標高3300^{メートル}、雪洞には計53泊。自己最長となる83日間(82泊)のハンターが終わった。

険しいルートが連続するハンターは、一度に運べる荷物の量が限られているため、荷上げの回数が増える。従って、登頂までの日数もかかり、登山の成否は天候に大きく左右されることになる。標高ではマッキンリーやフォアカーに及ばないものの、ハンターはとてつもなく手ごわい山である。これまでの経験から、ハンター冬季単独登頂は10年に1度チャンスがあるかないかだと思う。そのわずかなチャンスを、今後もひたすら待ち続けるつもりだ。

なおこの登山は、日本山岳会から平成21年度海外登山基金(秋・冬分)の助成を受けました。

オピニオン

新公益法人問題について思う

織方郁映

6月に開催された通常総会での協議事項は、公益法人と一般法人のどちらを選ぶかであった。メリットとデメリットを勘案して決めるという。

公益法人の方が一般法人より格が上と見られる点でメリットがあると聞く。JACは実力と栄光の重みによって無冠であることこそ似つかわしいと思っていた人々には、そこまで落ちたかと、嘆かわしいことだろう。そうした人には、寄付の税金控除措置によって寄付を受けやすくなる、という点についても、税金控除はなくても寄付が集まるような事業をすればよいではないか、と言いたくなる。

一般法人を選べば、現有の資産を何年かけてでも公益のために使いきった後は自由な活動ができる。しかし公益法人を選んだ場合は、未来永劫内閣府の監督の下に支出の半分以上を公益目的に当てねばならないと聞く。しかしそもそも、現有資産の大部分を公益向けに供

出せよというのは私有財産権を保障する憲法に抵触するのではない。か。そのようなことになるのはその法律に欠陥があるか、法律の適用に間違いがあるのではないかと義憤を感じる。その原因はお役人の拘子定規さと、本音と建前の使い分けにおけるJAC側の認識不足にあるように思われる。

つまり、社団法人である現在のJAC定款には「山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡懇親をはかるとともに、登山を通じてあまねく体育、文化ならびに自然愛護の精神の高揚をはかる」とある。公益が主たる目的になっているから、JACの現有資産は建前上公益に使うためのものと見なされる。つまり会員は、公益目的を承知で会費を納入していたと見なされても仕方がない、ということかもしれないのだ。

しかし、大部分の会員の認識は「入会の目的はクラブライフを楽

しむことであり、公益目的はついでにやればよい」という以外の何ものでもなかったはずであり、かつて「そのような認識でもよい」とのお役人の暗黙の了解のもとで社団法人を選んだ付けが今になって回ってきたといえるのではない。

今回の法人の選択においても同様な暗黙の了解によって公益法人を選び、いくばくかのメリットと引き換えに、補助金をもらっているわけでもないのに、お役人の煩わしい干渉を受けていくことになるのだろうか。今回の総会に提出された事業報告も公益法人化を見越してか、まず公益目的事業が挙げられ、会費を払って入会した会員が期待する会員のための共益事業は二の次になっている。JACの喫緊の課題は会員数の増加である。新法人法ではこれまでのような本音と建前の使い分けは許されずに「公益のために」が厳格に求められるのだろうか。だとすれば、JACは山に関連する公益のためのボランティア活動に人生の意義を認め、喜びを感じる人々、加えて山登りもできれば満足という人々の会であることを明確に標榜しなければならぬだろう。

入会希望者に対しては、「あなた方のJACへの期待にはできるだけ応えるが、まずは公益のために行なう会の事業に協力していただかねばなりません」と説明することになる。それで会員増加は望めるのだろうか。

大方の入会希望者のJACへの期待は「入会してさらにレベルの高い山との係わりを楽しみ、できればお役人の余計な干渉など受けずにJAC会員の自覚を持つて公益にも尽くしたい」というものだとすれば、公益法人は避けるべきではないか、と思考するのである。

オピニオン

「森づくり活動の基本ルール」を読んで

宮崎幸博

「森づくり活動の基本ルール」が『山』6月号に発表された。平成20年11月号の『山』に基本ルールを制定すべきだと私が提案して以来、結構な時間がかかっている。遅れた背景には、すでに「森づくり」が動き出していて当事者が多数いることと、これまでの実績をもとに現状を変えたくない、あるいは森林使用許可など一種の既得権益のようなものが絡むことがあったのではないかと推察する。

ひとことで「森づくり」というが、この言葉が環境問題、自然保護問題、地球温暖化防止とか二酸化炭素排出規制といった世界が直面している問題に、水戸黄門の印籠的な役割があり、なにをやっても許されるという幻想を抱いている人たちも多いのである。

「日本山岳会にとつての森づくりとは……」という議論がきちんとなされ、その意義、目的、あるいは必要性などを、定款と整合性を図った上で確認しておく必要がある。

った。時代錯誤の「なあなあ、まあまあ」の世界や「俺に任せろ、信用しろ」の議論だけで日本山岳会が森づくりに着手したとすれば、ガバナンス、マネジメントの欠如に加え、正鵠を得た議論が大いに不足していたことを、はつきりと指摘したい。

さて、制定された基本ルールを読ませていただいた。当初から「五カ条のご誓文方式でよい」と公言していたので、形に異論ない。しかし、役所でも今は試案段階でパブリックコメントを求め、「広く万機公論」を求めているのに、突然のルール制定公開には、依然として閉鎖的組織の残滓、弊害を感じざるを得ない。

内容を見てみよう。「1・位置づけ」で支部管轄下に置かれると規定されている。これは重要なキーワードだ。あえて言えば、「原則として」という文言は不要である。

「3・情報開示」が、「必要に

じて日本山岳会から情報の開示を求められたとき」という限定規定には疑問がある。たとえば、「高尾の森」では日本山岳会会員よりはるかに多い一般参加者が構成員である。そして、現場で汗を流しているのは日本山岳会の会員より一般参加者が多いという事実がある。こうした一般参加者には森づくりの会の会費納入を求めているが、その使途、あるいは予算について、ディスクローズ請求の道がないのは理解が得られないではないか。なぜ、情報開示請求者は日本山岳会のみに限定したのであるろうか。「2・各種書類の整備」を高高らかに謳っているのであるから、手続きさえ踏めば、随時ディスクローズに応じたらよいのではないか。

「7・活動の主体」で役員の主体は本会会員がこれにあたると限定したことと異論ない。が、この条件を満たすために、山登りに興味がなくても「森づくり」に一生懸命だという理由で日本山岳会会員に推挙される人が出る可能性がある。たとえば、あの人がいないと会報の編集は大変だ、あの人に辞められたら経理は持たない、など

という口実でJAC会員に推挙というやり方が出てこないとも限らない。2007年2月号の『山』（741号）の「東西南北」欄に「日本山岳会の入会について」と題して安易な入会を戒める意見があった。聞き流していい話ではあるまい。

ところで、基本ルールが出来上がったこれで終わりということではない。たとえば内規として「運用細則」、「Q&A」といったものがきちんと準備されていないと、「役員の主体」とか「不測の事態とは」などといった文言の解釈、運用で、錯誤や誤解に加え、拡大解釈が生ずる原因となるのである。中途半端な仕事、あるいは仕事の完結という意味をあらためて考えてほしい。

基本ルールの制定を機に、森づくり関係者には、これまでの活動を振り返るとともに、今後の方向と自らの姿勢を検証することが求められている。

オピニオン

日本山岳会の将来の姿を想う 会員数の激減をどう食い止めたらいいか

南島明典

明治38年に、小島久太氏らによって創立された日本山岳会は過日、100周年を迎えた。山を愛し、自然を尊ぶ者同士が一つのクラブに集結し、それぞれ感じるところは違えども、山を愛する気持ちには共通した熱いものがある。

日本で最初にできた山岳会も、近年では会員数が減少の過程をたどっている。現代は山岳愛好家が少なくなり、爆発的に登山を志した山岳嗜好時代は終わりを告げたことは明らかである。なぜかと言えば、近年はさまざまな遊びや遊び場が手近にあり、簡単に楽しめるようになったからであろう。

日本山岳会には一時は6000人を超える会員がいたのだが、現在5000人を割りかねないところまで会員数が減少し、入会者より退会者の方が多くなっているのが現状だ。

若いころに日本山岳会に入会

した人も今は60歳、70歳と高齢になり、自分で事業を営む人は別として、ずっとサラリーマンで人生を過ごしてきた人の退職後の生活の糧は年金に頼るのがほとんどであろう。こうした人生を歩んで高齢に達した人にとっては、1万2000円の年会費はこたえる。山岳会に籍はおきたいが、限られた枠内の収入では会費の捻出も出来なくなり、いたしかたなく退会の途を選ぶ人もいるだろう。

収入源を会員の会費に頼っている当会にとって、退会者と会費の減少は致命的な事である。不況下のこの時代では、企業や個人から以前のように多額の寄付金を期待する事も不可能であろう。年金生活者だから退会してもしようがないといつて会員数が減少していくのを黙って見てはおれない。このような年金生活者にも、会員として会に在籍していただいた方が

よいに決まっている。それではどうすればよいのか、具体的な策を考えなければならぬ。

急いで定款を改正して、年金生活者に限って会費を半分の6000円にしたらどうか。その代わり、全会員が1年間に最低1人の入会者を募る事にする。単純計算すれば、いま5000人いる会員が1年後には1万人になる。会の収入も現在より豊かになる事は確かだ。現在の日本山岳会は個人会員にとってメリットになる事はほとんどないが、これから山を深く志そうとする人にさまざまな教室や講習会を有料で開催していたらどうか……。

だが、日本山岳会を遠くから見ている人に入会を勧めるのは容易な事ではない。会の魅力を理解してもらうために、当会の行なうありとあらゆる行事を公開することが必要だ。日本で最も歴史ある山岳会の威厳だけを振っているのではなく、その時どきにある行事に入会希望者を招き、理解してもらう事が必要だと思う。

入会者が日本山岳会に興味を抱いた時が入会を勧めるチャンスである。いろいろ考え方の違う

人はいると思うが、入会者のその時の気持ちを逃がしてしまつたらチャンスは失つてしまう。一度入会の気持ちを失つた人を再びその気にさせる事は難しい。どうにかして入会させようと努力している人の身になって真剣に考えてみる必要もあろう。

公益法人を考える事もいいが、痩せ細っていく日本山岳会を元通りの姿に回復させる事の方が大事だと思う。これ以上会員数が減れば、日本山岳会は重病患者と同じである。会員一人ひとりが真剣に考える時である。

カルチャー

田淵行男の著作と本づくり

大森久雄

去る者は日々に疎し、という。

英語でも「Out of sight, out of mind」というから洋の東西を問わず、時間の経過はものごとを忘却の彼方に押しやる。しかし、そうはならないものがある。それが古典であり、歴史上の人物である。

傑出した写真文集を何冊も残した田淵行男とその作品もまた、そういう消え去らないものの代表であり、その古典的価値はいまなお輝かしい。その作品は長野県安曇野市にある田淵行男記念館で公開されている。

この記念館は田淵行男歿の翌年、1990年に開館したので、この2月から6月まで20周年記念として企画展「本に全てを捧げた人」が行なわれた。その企画展にあわせて「田淵行男と本づくり」をテーマに講演を頼まれて豊科に出かけたが、その内容をこの『山』に書けという依頼が担当の神長幹雄さんから届いた。

*

最初にお断りしておくが、ここでは田淵行男、または田淵さんと書かせていただく。また、安曇野市ではなく豊科と記述する。

*

田淵さんの最初の作品集アサヒカメラ臨時増刊『田淵行男 山岳写真傑作集』の刊行が1951年、46歳のとき。それから37年ほどのあいだに33冊(数え方によつて異なる)。そのどれもが超弩級の濃密な内容を持つのだから、驚異的なことである。私はそのうちの2冊の編集を担当した。『黄色いテント』と『山は魔術師』である。

恵まれたことであつた。

田淵さんの著作は写真が主体で、そこに文章と絵がからまつて写真集という独特の博物誌の世界を生み出している。そして原稿の執筆はもちろん、全体構成・写真やイラストの選択・レイアウトなど、編集作業の一切を自分でこなしていたから、仄聞するところによると、その作業に編集者は介在する



『黄色いテント』のケース

余地がなく、編集者不在に近い状態になることがあつたという。

あるとき、豊科のお宅で出来たばかりの本(たぶん『安曇野挽歌』だつたと思う)を拝見していて、いい出来栄えですね、と口にしたところ、意外にも「ダメです、これはダメなんです」と言う。どこがダメなのかと聞くと、写真がダメだと言う。そこで、ではフィルムを見せてくださいと頼んで出してもらつた。それを見てもダメとは思えない。それなりに再現されているのではないか。そこで、なぜダメか聞くと、答えは「フィルムがダメなんですよ」。

つまり、自分が出そうと思つた色がフィルムに出ていない、だからそれを製版・印刷で修整しようとしたけれどそれが出来なかった、ということのようであつた。

文章は下手な字で書いても、書いたことはそのまま組み入れ印刷さ

れて読まれる。しかし写真表現はカメラ・レンズ・フィルム・製版・印刷と幾重ものハードルを越えなくてはならない。写真家は(画家も)、その間に悔しい思いを経験することがあるのだろう。

編集作業を人任せにしないとか、写真の出来栄えを執拗に追究するとか、田淵さんは気難しいという世評はこういう姿勢から生まれたのかもしれない。しかし私は、編集作業のあいだにそういう経験をしたことは一度もない。いつも明るく穏やかで、編集者から見ても仕事のやりにくい人ではなかつた。つまり、田淵さんの言い分は理にかなつていたから、作業が多少煩わしくなることがあつても、それは十分に受け入れられるたぐいのものなのであつた。

『黄色いテント』は文章主体の、田淵さん唯一のエッセイ集で、田淵さんの著作のなかでは異色である。1985年11月の刊行だが、構想はすでに1959年ころにあつたらしい。しかし、それは長い年月、動かなかつた。優先順位のつよいほかの企画が目白押しだったからである。

その企画が動き出したのは

1982年5月。最初の原稿「山頂の石」を受け取ったのが1年後。最終原稿入手は84年11月だった。

エッセイ集なので、写真主体の従来の著作とは勝手が違ったのか、田淵さんは、どうしたらいいのかわからないのですよ、と手を出しかねていた。そこで私が判型や全体構成、装丁案などを提示することになったのだが、それには気持ちよく応じていただいた。

本文は活字組・活版印刷。オフセットはまったく想定しなかった。

函(ケース)に使った星の流れる黄色いテントの写真は、『山の意匠』にあるモノクロームの写真「天狗原の夜」と同じものである。函は本体とは左右が逆になるから裏焼き(逆版)にして、コンピュータ製版で色を付けたものだが、

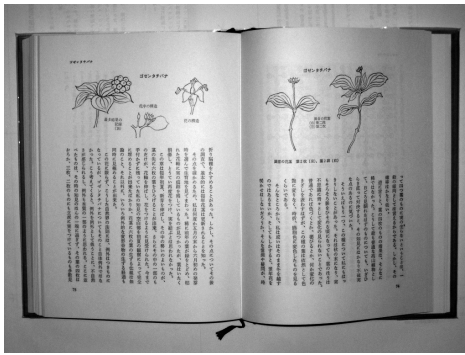
作品の裏焼き・色付けという乱暴な案を言い出すのには、いささか勇気を必要とした。とんでもないと怒られたら、代案を用意していいのだから行き詰まってしまう。左右逆でも影響がない花や木の写真を田淵さんの作品から選び出して、これを逆版にしたら問題ありませんか、ときいて反応を探るのが必要な予備行動だった。

しかし、1958年刊の『尾根路』の表紙は裏表同じ写真で、片方を裏焼きにしてあるのだから、田淵さんはすでに経験済みのことなのであった。当時、私はそれを出さなかったために、余計な気疲れをしてしまったわけだ。

製本完了で製本所から夕方遅くに見本が届いたその翌日、新宿駅から中央線の朝の特急に乗って豊科へ届けた。田淵さんの満足する顔を見て、やれやれと思ったこともいい思い出である。

＊

この本には85部の特装限定版がある。本体の装丁には田淵さん常用の黄色いテントを切り裂いて、その生地を使うという案が出てい



『黄色いテント』の本文

た。しかし、そのテントは豊科の郷土博物館に展示されていたので、それを引き上げるのはいかにも無謀だった。そこで浅黄色のテントで代用することになり、それが送られてきた。かなり汚れていたもので、製本所からクリーニングに出した。きれいにはなったが野性味がなくなってしまうので、ちょっと失望したのを覚えている。

製本所の床にひろげて型紙で寸法をはかり、85部なら確実につくれる、という結果をみて制作部数が決まった。定価は2万円だったが、即完売。その2年後だったか、某古書店のカタログに12万円となっていた記憶がある。

＊

田淵さんは常念岳に206回登ったとされている。楽しみの登山というよりは、高山蝶を主体とする博物研究のフィールドワークだったのだろうが、揮毫を頼まれた「一山百楽」と認めた。これは深田久弥さんが「百の頂に百の喜びあり」と書いたのとは対極の位置にある言葉だ。しかし、そのどちらにも、そこに自分独自の確固とした世界が構築されているのを見なくてはならない。

＊

『山は魔術師』は編集準備段階で田淵さんが亡くなったので、水越武さんの全面的な協力を得て、残されたコンテを参照しながら編集作業を行なった。当初の意図とは違う内容になったが、遺志は十分に受けついただと思っている。田淵さんの山の写真は重厚で、その量感は圧倒的なつよさを持っているから、モノクロームの写真でそれを確実に再現するため、大日本印刷技術陣と相談して、2色製版・2色刷りとした。最高の結果が出たと思っている。

1995年春、刊行記念に東京銀座のニコンサロンで掲載作品の写真展が行なわれた。ニコンサロン新記録の入場者数を記録したという。

＊

田淵さんは「わしのすべては本だ、本がわしのすべてだ」と語ったという。田淵さんの著作はどれも古書店でかなりの価格になっている。気安く買い求められないのは残念だが、田淵行男記念館ではその著作と関連資料を公開している。幅も奥行きもある田淵行男の世界を味わっていただきたい。

東北 — 南北 —

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

昭和天皇、皇太子時代の富士登山

長田義則

今年も賑わう夏山を迎えている。佐々木秋田支部長提供の絵ハガキは、大正12年7月27日に昭和天皇が、皇太子(摂政宮)時代に登られた富士山頂での記念写真である。

皇太子殿下の富士登山は須走口からの登山。予定より40分も早い11時5分に山頂に達し、昼食後はお鉢回りをされ、剣ヶ峰にはしばらく立たれた。

御殿場口の下山路では、危険な岩や雪溪の中へ勇敢に飛び込まれ、七合目からの砂走りでは始めから先頭になられ、お伴の人たちと砂煙りをあげながら前後をあらそい、自由な青年としての1日を楽しま



東宮殿下富士山上ご英姿
金名水のご休憩

れた(7月28日、東京朝日)。
また、別行動の秩父宮殿下は、26日に槍ヶ岳を登攀した。その後殿下はこの登山を機に、山岳会のようなそうたるメンバーと、国内外の岩・山・スキーを楽しまれた。
26日の午後4時、焼岳が突然噴火し(28日、大阪朝日)、両陛下は富士山と槍ヶ岳で、その噴煙に驚きの目を注がれたと思われる。
8月19・20日には、秩父宮殿下も富士山に登られた(雅仁親王実紀)。登山直後の9月1日、京浜地帯が壊滅的打撃を受けた関東大震災の大正12年は、明日への記憶として語り継がれている。

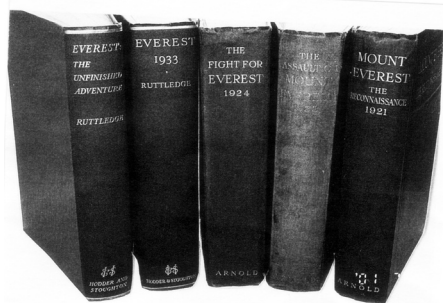
ヒマラヤ文献の古典

鈴木正規

ヒマラヤに限ったことではない。日本でも、山について書かれた本の数はおびただしい。しかし、自分の本棚に納め、いつも座右におきたいと思える本は、そういくつもあるものではない。

もちろん、自分がほしい・選んだ本だからといって、すぐ手に入るものでもない。なかには、何十年かかってもなかなか入手できないものもある。また、「そこにその本があるから」といったところで、先立つものがなくては購入もできない。

世界大戦が過ぎると、ヒマラヤも新しい時代に入った。戦前から懸案であったエベレストへの試み、挑戦が始まったのである。1921年、ハワード・ビューリーの踏査隊。1922年、24年、ブルース・ノートンの試登。さらにラトレッジの率いる1933年の2回の試みや、1938年のティルマン隊などだ。



エベレスト登山文献の古典

これらのエベレスト隊は、例外なく堂々たる業績をあげている。ただどれも、頂上に到達する幸運には恵まれなかった。しかし、山においての失敗の記録は、成功の記録よりも興味が深く、また価値がある。そして、この英国隊の悪戦苦闘を物語る6回にわたるエベレスト遠征の記録は、どれも第一級のヒマラヤ文献として、長く残ることだろう。

二つの大戦にはさまる20年間には、1931年のカメット登頂があり、1936年のナンダ・デヴィの登頂がある。また頂上こそは逸しているが、バウアーによる目覚しいカンチェンジュンガ、メルクルのナンガ・パルバットの試

登も繰り返されている。そして、これらの勇壮で、しばしば悲劇的でもあった登攀は、いずれも立派な文献の形で記録されているのだが、こうしたものを一つひとつ挙げていきりがない。

そこで、思いきって自分なりに厳選してみたい。となれば、結局はエリック・シプトンの『ナンダ・デヴィ』が最後に残る。シプトンのこの本の原版は、同じ筆者の『地図上の空白』とともに、今ではなかなか手に入らない本で、どちらも文学的価値の高い評価を受けている文献である。

さて、第二次大戦後はどうだろう。1950年のアンナプルナ登頂で幕が明け、「最初の8000メートル」と、隊長モリス・エルゾーグの報告書の副題にあるように、それはまさに人類が足跡を印した最初の8000メートル峰であった。

その意味で、戦後の本のなかでは、このモリス・エルゾーグの『アンナプルナ』と、ジョン・ハントの『エヴェレスト登頂』の二著は、出版されたそのときから問題なしの古典書として受け入れられる性質のものであろう。

国土地理院でのサプライズ

新妻 徹

自然保護全国集会に続くバス研修「スタディン霞ヶ浦」の2日目は、気持ちのよい前日のカルチャームードで、車内は朝から知的期待感がただよっていました。

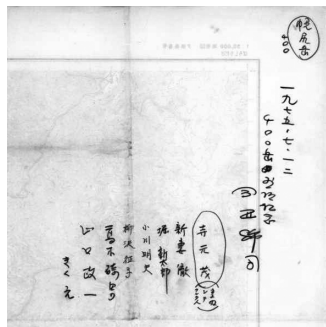
6月14日、この日国土地理院に行き、地図と測量の科学館は定休日なのに開館してくださり、オリエンテーションルームの大スクリーンに、今西錦司先生が寄贈された1000枚以上の地図から北海道の日高山脈「カムイエクウチカウシ山」に登頂された時の地図がアップで放映されました。その裏面の今西先生のサインの横に私の氏名があり、思わず「アッ、私のサインです!」と、大きな声を出してしまいました。

1973年6月15日から日本山岳会北海道支部は第4回現地支部長会議を十勝岳で担当し、今西錦司会長は2日目の登山で十勝岳から上ホロカメットク山へ縦走され、翌年は日高山脈の第二

の高峰であるカムエクを希望されました。

当時、私は北海道支部の企画委員であり、伊藤秀五郎支部長から「ぜひご案内してください」と言われ、帯広の大山幸太郎、西山泰正兄とルートやサポートメンバーについて相談しました。今西先生は登頂後、大変喜ばれて、北海道の山岳季刊『北の山脈』16号に、「山・谷・魚——カムイエクウチカウシの記」として長文の寄稿をされています。その一部を紹介しましょう。

《今夏(一九七四年)は日高山脈へはいる決心をした。日高といっても山はすぐたくさんある。しかし、私の登る山はすでにきまっていた。それは今から37年まえ(一九三七年八月一日)に私が日高山脈の最高峰ポロシリ岳(二〇五



今西錦司氏の横に記されたサイン

二米)の頂きに立って四方を見渡した時、はるか南にカールをめぐらしてそびえるひとときわ高い山をみつ、地図と見くらべて、その山がカムイエクウチカウシという何とも得体のしれぬ北道的アイヌ的な神秘的な名をもつ山であることを知った時から、この次もう一度日高の山へ登りにくることがあつたら、今度はこの山に登ろうと決めていたのである。高さも一九七九米あつてポロシリに次ぐ日高山脈の第二高峰なのだから、この山は登るに値するのである。(中略)それも最高峰のポロシリにさえない一等三角点が、その頂上におかれているというのだから、この山は私にとっては、いよいよもって登るに値する山だ、ということになるのである。

今西先生の全文を紹介したいほどカムエク登頂を喜ばれ、今でも4日間を必要とする日高の沢歩きを体験されて、メスのヤマメとオスのヤマメそしてマスとの棲み分けに言及されるなど、現在の開発と自然保護のあり方について多くの教示を受けた私の大切な想い出です。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

自然保護委員会

10年自然保護全国集会開催

2010年自然保護全国集会は、福岡支部との共催で、6月12日～13日の2日間、東京で開催された。

1日目は、午後からJACの104号室での支部報告からスタートした。21支部から42名の参加があった。東海(箕浦)、石川(埴崎)、京都(酒井)、信濃(穂苅)、広島(前垣)、山形(志田)、北海道(樋口)の7支部からの報告と意見交換が行なわれた。北九州支部(富澤代理報告)の報告の後、出席の支部代表から年間の活動状況・地域の問題点などの簡単な報告をお願いした。2月に発足した東京多摩支部からも、今後の活動予定などが報告された。

最後に、今期の自然保護委員会予算の大幅削減に伴い、機関紙『木

の目草の芽』について読まれているのか、送付方法についてなど意見交換した。読まれているのかについては、機関紙としての役割を果たしていることを認識できた。また、送付方法については各支部への一括送付とすることで送料削減の見通しがたった。その後、会場を移して懇親会を行なった。

2日目は、場所を上智大学のキャンパスに移してのシンポジウムである。テーマは、「世界自然遺産を考える——自然環境の保全と利用のあり方」で、9時30分～16時まで真剣かつ熱心な討議が繰り広げられた。尾上昇会長のあいさつの後、堂本暁子氏の「生物多様性と世界自然遺産」と題した基調講演と続いた、この講演は、10月に名古屋で開催される「生物多様性第10回締約国会議(CBD-COP10)」の事前勉強会としてもタイムリーなものであった。



屋久島の全般的な問題が語られたパネルディスカッション

集会は、ここから世界自然遺産の具体的な話が展開された。各地からの報告として、知床、白神、屋久島からそれぞれ具体的で生々しい報告があった。午後は、この問題に取り組み始めてから、現地調査を3回実施している富澤克禮と山本博の2人から報告があった。続いて本日のメインイベント、パネルディスカッションである。

パネラーを加藤峰夫、愛甲哲也、柴崎茂光、太田五雄、上幸雄の5名にお願いした。司会進行は、山川陽一が担当した。

屋久島の全般的な問題やトイレ・登山道・ガイド問題などにつ

いての議論がなされた。各パネラーからの発言に続き、来場の方との熱心な意見交換も行なわれた。

最後にコーディネーターの加藤先生からまとめの発言があり、盛会のうちに終了した。参加者は、外部の一般参加の65名を含めて163名だった。屋久島問題は、このシンポジウムで、ようやくスタートラインについたところである。

今後、この議論を踏まえ屋久島についての「提言」をまとめ、各行政機関、関係団体、島民に働きかけて意見交換を行ない、問題解決につなげていきたい。

シンポジウム終了後、バス研修に参加する50人ほどは、霞ヶ浦に向けて出発した。

(富澤克禮)

スタディン霞ヶ浦

(茨城支部・緑爽会協力)

霞ヶ浦畔の宿舎に到着すると、すでに地元の方々が待っていてくださった。会食の席では一行を代表して藤本副会長があいさつ、星埜茨城支部長が乾杯の発声。酔う間もなく「スタディ」が始まった。芥川龍之介『蜘蛛の糸』の朗読を福井緑(劇団芸協)さんが熱演、

集委員会

(山研・科学・自然保護委員会後援)

第8回土曜懇話会

音楽担当で蜘蛛学会々員でもある中島はるさんの「蜘蛛の生態」の講演に続いて「土浦の自然を守る会」の奥井登美子さんから霞ヶ浦の水質保全に関わってきた運動の経過を、同じく萩原富司さんから「外来魚による生態系の危機」について報告があった。ゲストを合わせて集会参加者は約60人。

翌14日はあいにくの雨で、筑波山登山を予定していた人の多くが国土地理院見学の流れ、登山者7人に支部のガイド5人がつくという贅沢な山行となった。特別に開館してくださった国土地理院では、雨宿り組も快く受け入れて半日ゆつくり見学させてもらうことができた。測量の話、日本列島俯瞰図、同じく球体模型等々、今西家から寄贈された元会長の赤線の入った地図も関心の的だった。

筑波山組の帰着を待つて午後は霞ヶ浦大橋から鹿島神宮、潮来方面へ向かった。車中、常陸国や利根川をめぐるさまざまなテーマでスタディが続いた。

(近藤 緑)

6月19日、ルームにて森武昭常任評議員を講師に「自然エネルギー発電の現状と課題——山岳地域を中心として」について講演をしていただいた。参加者は32名であった。実体験を通した具体的な課題の提起など、映像を駆使したわかりやすい説明であった。

まず講師より「地球温暖化対策の大きな柱の一つに自然エネルギーの実用化促進が挙げられている。しかし、この普及に向けては技術面だけでなく多くの問題点を含んでいる。本講演ではこの点を解説し、エネルギー問題を参加者と共に考えてみたい」とのコメントがあり、講演が始まった。

森氏は四半世紀前から、山岳環境保全の重要性を認識し、山小屋での自然エネルギーの実用化に取り組んできた。それは地球温暖化防止への取り組みの先駆けとなった。

我が国の自然エネルギーとして、太陽光発電、小型風力発電、小規模水力発電をあげ、それぞれの特

徴、長所と短所、実施の状況などについて詳細に説明した。

太陽光発電は25年前、最初に穂高高山荘で取り組み、その後、蝶ヶ岳・笠ヶ岳・双六小屋・丹沢の塔ノ岳で実施。平成に入りコマージュ・シヤルベース化が進み多くの山小屋で導入された。保守が不要で取り扱いが容易な半面、発電量が天気任せで、最大出力の10割ほどで設備利用率が低いのが短所。独立型で使用する場合、バッテリー容量を決める考え方が設計のキーポイントになる。

10年前、上高地にある山研の一角に出力1キロワットの水力発電設備が設置された。これは20年前、老朽化した建物の建て替えに当たり、研究所の名に相応しい事業として自然エネルギー利用の研究が提案され、約10年間の歳月を費やして完成したものだ。

その水力発電設備から得られた多くの分析データは、現在、山岳地での小規模水力発電の実用化に貢献している。氏はこの実用化研究の中心で実行推進役であった

(『山岳』第九七、巻末参照)。

次に、我が国の自然エネルギーの実情については、全使用エネル

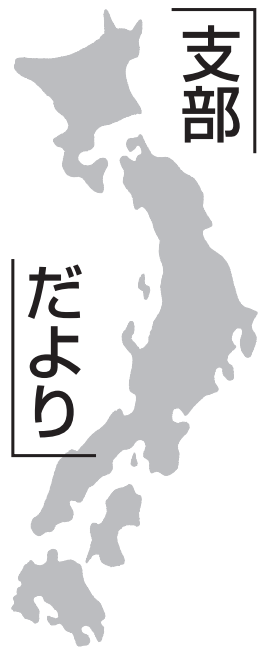
ギーの4割強が電力であると説明し、二酸化炭素削減のためには自然エネルギーを推進する必要がある不可欠であると述べた。自然エネルギーの今後の動向として、風力発電、小水力発電、太陽光発電のそれぞれの特徴について解説した。特に太陽光発電は、自然エネルギーのなかで最も普及が期待されるという。また、国の補助金は復活したが、休耕地・道路のり面・公共施設の屋上などで設置するためには法の整備が必要だという。

最後に、「我が国は地球温暖化防止のための排出ガス(二酸化炭素)を2012年までに1990年実績の6割減を国際公約している。しかし実績では、逆に10割ほど増えている。今後、対策として、自然エネルギーの普及、省エネルギー、節電、緑化、非ガソリン化があげられる。山小屋や山岳関係では以前から環境保全を意識して、実用化レベルでいろいろな行動を実践してきた。これからは同じ取り組みを平地の一般家庭でも行なっていくことが強く望まれる」と結んだ。

(野崎和彦)

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

青森支部

青森・秋田・岩手支部親睦登山

「集まろう三県に交わる四角岳へ」のスローガンのもと6月20日、青森・秋田・岩手3支部の交流・親睦登山が行なわれた。

青森支部は田子町花木ダムの登山口から入山。予定通り8時30分にマイクログラスで登山口に到着する。すでに到着していた秋田支部のメンバーと前夜からテント泊をしていた仲間と合流する。

秋田支部は中岳まで足を延ばすとのことで、早々に出発する。青森支部は支部長在住十和田市のホテルで仕込んでもらった馬肉鍋25人分やらビールやらを手分けして背負子やザックに収め、9時過ぎによろしく出発する。重荷なので、こまめに休憩を入れて登る。3ピッチ目あたりから雨が降り出した。11時20分ころ、四角岳(1000

3m)に到着。岩手支部6名、秋田支部9名、青森支部10名、合計25名が山頂に集まった。

どしゃ降りに近い雨のなかで、馬肉鍋をコンロで温め、ビールと一緒に皆さんに配り食べていた。風雨は一向に収まらず、雷鳴も続いていたので、食後すぐに記念撮影をして、秋田、岩手支部は12時には下山する。青森支部も



雨のなか、三県に交わる四角岳頂上で

片づけ後、12時20分に下山開始。14時16分に登山口に無事到着する。天候には恵まれなかったものの、青森支部の呼びかけに応えて秋田・岩手両支部から多数参加していただき、懐かしい方々と交流することができた。(須々田秀美)

山梨支部

「山の日」と第六回山の博覧会

山岳・森林が県土の78%を占めている山梨県は、平成9年、全国に先駆けて「山の日」を宣言した。8月8日を、やまなし「山の日」に制定して14年目を迎えた。「山に親しむ」、「山に学ぶ」、「山と生きる」の三つをコンセプトに将来にわたって豊かな山や森林の恩恵を享受できる自然との共生社会を目指すしている。

県内各地では、毎年7〜8月にかけて山の日に関係した事業、たとえば親子登山・キャンプ教室、森づくり体験会、動植物・昆虫などの自然観察会など50前後の啓発・記念・関連事業を実施している。その記念事業の一つとして山梨支部では「山の博覧会―山を知ろう山へ行こう」を開催してきた。



八ヶ岳の魅力が語られた講演会で

登山の普及と山岳文化の振興を目的に日本山岳会創立百周年の平成17年から毎年7月、「山梨学院生涯学習センター」の共催と絶大な協力を得て、また平成20年からは山梨県「やまなし山の日実行委員会」とも共催して開催している。

六回目の今年は7月10日、会場の山梨学院大学のメモリアルホールで「八ヶ岳特集」として、八ヶ岳登山の魅力と危険、縄文の八ヶ岳、八ヶ岳の信仰と題した三つの講演と山岳映像「八ヶ岳―百万年の奇跡に魅せられて」を上映した。参加者は昨年と同様満席にちかい430名。全員に「山の日」制定協議会作成の山の日パンフレットを配布するとともに、本部から出席していただいた成川常務理事はいさつのなかで「山の日制定」について支援と協力を訴えかけ、盛況のうちに閉会した。(古屋寿隆)

英文ジャーナル2010年第11号発行

池田常道

過去10年にわたって、ほとんど独力で編集にあたっていた中村保さんの後を受けて今号から編集を担当することになった。思わぬアクシデントもあって大幅に遅れてしまったが、7月末に何とか発行にこぎつけることができた。今号では巻頭に「中国の知られざる山々」という特集をおき、四川からチベット、新疆まで10本の記事を掲載した。中国、ロシア、デンマーク、ポーランドからも寄稿があって『AJ』や『AAJ』に負けない、充実した内容になったと自負している。次章「登山と遠征」でも積極的に原稿を依頼したが、残念ながらいくつか無視されてしまったものがある。『AAJ』などに比べて知名度はいまひとつというところだろうか。ただ、英語ネイティブでない国の人たちからの寄稿が少なからずあったことはうれしい。日本はもちろん中国や韓国など非英語圏のクライマーの活躍を英文で世界に発信することは、本誌の大きな役割のひとつだと思っている。我が日本の登山家諸氏よ、どうか億劫がらずに積極的な情報提供と寄稿をお願いします。



2010年7月
B5判 160頁
頒価 2,000円
(送料込み)

JAPANESE ALPINE NEWS vol. 11, July 2010 目次

■ Feature Articles: Unknown Mountains in China

The First Ascent of Lopchin Feng (KG-2) 6,805m,

by Tatsuo (Tim) Inoue

神戸大学隊によるカンリ・ガルボのKG-2峰初登頂記録
Autumn 2009 Expedition to Eastern Tibet,

by Tamotsu (Tom) Nakamura

禁断の東チベット5,000km踏査行、念青唐古拉山東部の4エリアを収録
The First Ascent of Ren Zhong Feng, Sichuan,

by Kristoffer Szilas

デンマーク隊によるミニヤ・コンカの南、幻の6,000m峰初登頂
The First Ascent of Pt. 6,134m in the Minya Konka Massif,

by Alexander Ruchkin

Eコンカを断念したロシア・ペアが見つけた珠玉の未踏
Bu' gyai Kangri Expedition: A Permission Issue in Tibet,

by Takao Ohe

ブジャイ・カンリへの入山を拒否された東北大学隊の顛末
The Direct South Face of Siguniang, by Yan Dongdong

四姑娘山南壁新ルートをアルパイン・スタイルで登った中国ペアの登攀記
Ascent of Lamo-She 6,070m in West Sichuan 2009,

by Tomas Obtulovic

チェコ隊のラモ・シェ再登と登山史ノート

Unclimbed Summits in Sichuan China 2010,

by Tamotsu (Tom) Nakamura

四川省に残されている5,000～6,000mの未踏峰を多数の写真で紹介
The Reconnaissance in Mayer Kangri and Jomo Ri Mountains,

by Janusz Majer

2008年秋にチャンタン高原を踏査したポーランド隊の報告、詳細地図も掲載
On the Petals of Snow Lotus: The Great White Jade Heist on Xueliang West,

by Bruce Normand

新疆の雪蓮西峰北壁を登った英米トリオの記録、
第18回ピオレドール受賞作

■ Climbs and Expeditions

Things Invisible to See: A quest for unknown mountains in China and Nepal,

by Joe Puryear

米国ペアが中国・四川省とネパールでさぐった価値ある未踏峰の記録

Makalu: the first winter ascent and Cho Oyu: the Southeast Face,
by Denis Urubko

マカルー冬季初登頂とチョー・オユー南東壁で達成した8,000m峰14座完登
The West Face of Nemjung, Alpine Style, by Osamu Tanabe

ネムジュン西壁をアルパイン・スタイルで初登攀した信州大学隊の記録
Spantik's Golden Pillar, the Third Ascent, by Kazuaki Amano

昨年カランカ北壁に成功したトリオがカラコルム屈指の難ルートを再登した
The Korean Golden Peak Climbing Team 2009, by Kim Hyung-II

スパンティーク北西壁に新ルートを拓いた韓国隊の記録
Exploration of Veiled Reru Valley in Zaskar, India,

by Kimikazu Sakamoto

インド、ザンスカールの知られざる谷を踏査した報告
Lilio Chhish 5,708m, Pakistan-Japan Joint Party, by Kazuo Sato

磐梯カラコルムクラブの日パ合同遠征報告
First Austrian Queen-Maud-Land Expedition Antarctica 2009,

by Christoph Hoebenreich

オーストリア隊の南極、クイーン・モード・ランド遠征記録
Greenland Climbing Expedition—Ragni di Lecco, by Simone Pedeferra

イタリア「レッコの蜘蛛」チームによるグリーンランドの記録

●

■ Regional Notes

Notable Japanese Climbs in the Himalayas 2009,

by Tsunemichi Ikeda

2009年日本隊のおもなヒマラヤ登山記録

Expeditions to the Indian Himalaya 2009, by Harish Kapadia
2009年インド・ヒマラヤの登山記録

Final Report of Mountaineering Expeditions

Visiting Pakistan During 2009, by Karrar Haidri
2009年パキスタンの登山記録

●

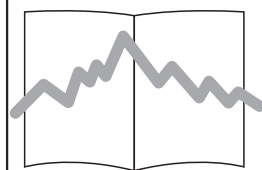
■ Special Contribution

Japanese First Ascents in the Cordillera Blanca, Peru,

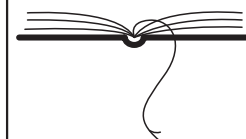
by Antonio (Sevi) Gomez Bohrerquez

ペルー、ブランカ山群における日本隊の初登頂記録

* Japanese Alpine Newsはバックナンバーの在庫があります。
ご希望の方は事務局までお問い合わせの上ご注文ください。



図書紹介



川喜田喜美子、高山龍三・編著

『川喜田二郎の仕事と自画像—
野外科学・KJ法・移動大学』



2010年4月
ミネルヴァ書房刊
A5判 381頁
定価 3990円

昨年逝去された川喜田二郎名誉会員の生涯と業績を紹介する本であり、副題の「野外科学・KJ法・移動大学」が本書の性格をおよそ説明している。『川喜田二郎著作集』（全14冊）が1995年から98年にかけて中央公論社から刊行されているが、その各巻に掲載された著者自身または他の研究者が執筆した解説その他の文章を集成したものがおもな内容である。

第一部・私の仕事と自画像（約200頁）は、著者が各巻末にのせた「あとがき」を配列したもの。

その巻に収録した個々の作品を要約し、あるいは補強している。最終回配本の別巻『私の人生論 年譜 著作目録 総索引』に書かれた著作集全体のあとがき「私の自画像を語る」は平和を希求し、KJ法を組織し、パイオニアたらんとして生きた著者が生涯を振り返って書いている。

第二部・川喜田二郎曼荼羅（約50頁）には、第3回配本以降に付された各分野の専門家・研究者10人による解説が並べられている。川喜田さんとかかわりがそれぞれに異なる人たちからみたひととなりや業績がいろいろな角度から説明されている。発想の人、思索の人、行動の人であった故人の多彩な人物像が描き出される。

第三部・川喜田二郎の宇宙（約50頁）は、半世紀にわたり氏の間近にいた後輩・共同作業者であり、研究者であり、著作集作成にあた

っては最大の原動力となった高山さんが各巻の付録として執筆した文を集めている。

第四部・川喜田二郎の伝言（45頁）はチベット文化研究会における講演「21世紀にチベット文明が寄与するもの」を文章化したものと、喜美子夫人が『看護教育』誌に寄せた「KJ法の思想——川喜田二郎と歩んだ半世紀」の二本を収める。末尾には「KJ法学会三二年間の歩み」、「移動大学の歩み」、「川喜田二郎略年譜」など資料的なもの五点と「人名索引」が付されている。

川喜田二郎さんは京一中、三高を卒業、京大で元会長今西錦司博士らの登山、探検グループに属し、大興安嶺探検隊（1942年）に参加したのは京大の学生時代である。本会の第一次マナスル登山隊科学班（1953年）の一員として中部ネパールをひろく学術調査し、58年には自ら西北ネパール探検隊を組織してチベット文明と正面から取り組む「野外科学」の研究者の生涯を送ることになる。

フィールドで集めた膨大なデータの処理法を苦心考案するなかで「KJ法」に到達し、これは学界

にとどまらずビジネスの世界で問題解決の技法として利用されるにいたった。60年代末の大学紛争時には移動大学という斬新な教育活動を開始、一方ではネパールヒマラヤの奥地山村にポンプ揚水とパイプラインを設置するヒマラヤ技術援助運動を起動させるなど、多彩な活動を展開されたのである。日本ネパール友好協会を設立、運営にたずさわるなど一貫して文化交流に力を注がれ、秩父宮記念学術賞、マグサイサイ賞（国際理解）なども受賞しておられる。

野外科学者、平和希求の思想家、先駆者魂に燃える行動者としての生涯を理解する好適な書が世に送られたとの感を深くするのは私一人ではあるまい。（酒井敏明）

米倉久邦・著

『森をゆく——人と森のか
わり』を訪ねて』



2010年6月
日本林業調査会刊
B6判 221頁
定価 1800円

著者の米倉さんはもと共同通信

の記者である。高校山岳部以来の友人であり、そろそろ定年に近づいたところからお互いに誘い合って山に登り始めた。その記録が盛り込まれた異色の百名山本である彼の著書『六十歳から百名山』が誕生した。一方、彼は50歳後半で森林インストラクターの資格を取得した。私も後を追って3年後に取得、誘い合って国内の主要な森を訪ねた。その記録が本書『森をゆく「人と森のかかわり」を訪ねて』である。

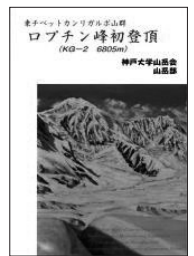
私は本書に納められた森の取材の9割近くに同行、同じ場面を共有してきた。私なりにメモを取り、写真も撮った。しかし、この本を読んで驚いた。ジャーナリストの確かな目を通して描かれた森は、私の記憶や記録のなかにある平板的な森とは異なり、あたかも3D映像のような森の物語に変貌していた。情報の収集力と整理力、再構成力に改めてジャーナリストの力を感じ、脱帽した。また生態系としての森の特徴が、ムダのない文章で余すところなく記述されており、森林インストラクターとしても面目躍如たるところである。それぞれの森がそれぞれの長い

歴史のなかで自然や人の脅威を受けつつ、それでもたくましく生き残ってきた経緯とその森を守るために重要な役割を演じた人々の活動が生き生きと描かれており、読む者を惹きつける。ジャーナリストの力量と森林インストラクターの知識が融合してできた物語が本書と言えよう。森を題材とした本は林学や生態学に分類される学術的なもの、森の魅力を叙情的に描いたもの、あるいは森のガイドブックのものに分かれるが、本書はそのいずれでもなく、それらが程よくミックスされた好書である。

読むものを飽きさせないのはストーリー性であり、本書を物語と呼びたいのはまさにそのストーリー性の故である。本書を手にして渋谷から電車に乗り、下北沢で降りるはずを明大前まで乗り越し、引き返して再び池の上まで乗り越した、という恥を明かせばその面白さがご想像いただけると思う。

(平野裕也)

神戸大学山岳会・山岳部／発行
『山と人18号——ロプチン峰初登頂』



2010年3月
B5判 420頁

この報告書には、初登頂の記録とともに、ここに至るまでの道のりが克明に語られている。神戸大学山岳会が1986年のクーラカニリ登頂後に行なった横断山脈踏査の旅の途中に出会った岡日嘎布山群は当時、世界のほとんどの登山家には、まだ未知の存在であった。

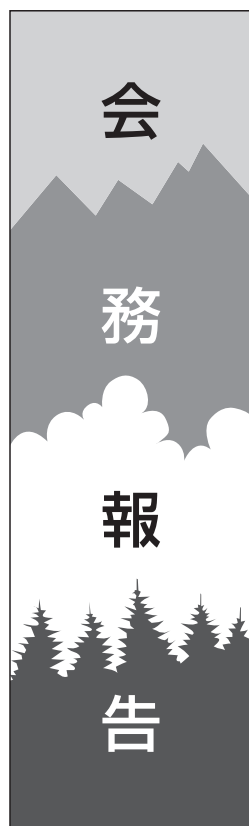
この出会いの後、神戸大学山岳会は当時の平井一正会長を中心に、カンリガルポ山群への思いをもち続けるとともに中国登山協会や中国地質大学との絆を確かなものにする努力を重ねて、2003年のカンリガルポの最高峰ルオニイの登山許可を得て挑戦にいたった。

このときは不首尾に終わったが、その後、平井会長の後を継いだ井上達男会長らのこの地域の研究、偵察によって対象を第二の高峰ロプチンに変え、中国地質大学との合同登山隊によって今回の初登頂をなしとげた。

また、この報告書の特徴は「山」についてはもちろん、「人」の活躍にも重きをおくというコンセプトをもつ山岳会、山岳部の会誌『山と人18号』として出していることである。正式の報告以外に何らかのかたちでこの計画に関与した多くの人達の思いを綴った文章が載せられている。頂上アタックの記録にしても2名のアタック隊員がそれぞれの立場で書いた記録と頂上からの下山をサポートした山本登攀リーダーの記録を読むと、下山に困難を極めたアタック隊の様子が目で見えるように知ることができる。

第二部の井上達男による調査研究「カンリガルポ山群東部の山々」とこの報告書の最後につけ加えられた「カンリガルポ山群の主要ピークの標高について」では、最近利用されることの多くなった衛星観測による地形図を使用するに当たっての注意点を解説し、それを考慮して、最新の地球観測衛星のデータと現地での観測データ等を使ってカンリガルポ山群の主要ピークの山座同定と標高の推定を行っている。

(伊藤英弘)



平成22年度第4回(7月度)理事会
日時 平成22年7月14日 18時30分～21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 尾上会長、神崎・宮崎・

藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・谷川・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

明、報告とそれらに対する質疑、意見交換を行なった。

【審議事項】

1・事務局長の募集(尾上、宮崎)

専任の事務局長をおき、一部役員・委員会の負担軽減と事務円滑化をすすめる、会員および外部機関等に対するサービスの充実、迅速的確な対応を図り、さらには新法人移行における主務省宛て申請書類作成事務やその窓口対応等を円滑に推進する。年内を目途に体制をスタートさせたい。

なお、会報およびホームページで応募者の募集をする。(承認)
2・大学山岳部の持つ山小屋の研究(仮題)後援(中山)

信州大学(研究代表者、工学部建築学科教授 土本俊和氏)から調査への協力依頼があり、4月度理事会(報告事項)において協力の方向付けがなされたが、今回同

大学の研究に対する日本山岳会の後援依頼があらためてあった。

(承認)

3・2010年度前期海外登山基金審査報告(萩原)

前期分として3隊から助成申請があり、7月8日に海外登山基金審査委員会を開催した。

審査の結果は次のとおり。(登山内容、登山隊名、登山時期、助成金の順)
①アマ・ダブラム(6856^{メートル})

北東壁における新ルートまたは第2登、アマ・ダブラム北東壁遠征隊2010、9月24日～11月15日、10万円

②アウトライアー東峰(7035^{メートル}) 南西壁からの初登頂、2010 青山学院大学アウトライアー登山隊、8月25日～10月23日、20万円

③チャンラ峰(6563^{メートル})の初登頂、同志社大学西北ネパール登山隊2010、8月10日～10月下旬、30万円 (承認)

4・転載許可願(山岳・会報記事)(宮崎)

大町山岳博物館友の会から、大町山岳博物館依頼の「北アルプス登山史資料 1 鹿島槍ヶ岳登山

史」の編集にあたり、当会の山岳および会報記事の一部を転載したい旨の許可願があった。(承認)

5・ロゴマーク使用願い(宮崎)

東京多摩支部から渉外用名刺およびTシャツに当山岳会のロゴマーク使用願いがあった。(承認)

【報告事項】

1・平成22年度通常総会報告・支部長会議報告(宮崎)

6月12日、それぞれ開催され終了した。総会議事録、決算書類等は文部科学省に提出済み。

2・102号室改装終了(宮崎)

6月末に改装を終了した。今後2階の借室(201号室)に保管の資料等を各委員会等の協力を得て順次102号室等に移し、201号室の現状復旧工事を9月には着手したい。

3・山岳トイレ整備補助金の廃止(山川)

6月9日のいわゆる事業仕分けで補助金の廃止が打ち出されたが、山岳団体自然環境連絡会から環境省に意見書を提出する。

4・サンビュハイツ四番町總會報告(宮崎)

当会入居のサンビュハイツ四

総務委員会からのお知らせ

■新入会員オリエンテーションの開催

2009年9月～2010年7月入会者を対象に、少しでも早く山岳会に慣れ親しんでいただき、活動の足がかりとして利用いただけるようオリエンテーションを開催します。

当会の活動状況、委員会や同好会の紹介、図書室、ホームページの活用、グッズ販売などのご案内もいたします。これから始まるクラブライフを楽しく過ごすためにもぜひご参加ください。該当者には詳細を別途ご案内します。

期日＝10月2日(土)13時半、日本山岳会ルーム(東京・市ヶ谷)

■年次晩餐会開催

12月4日(土)年次晩餐会を開催します。

本年の催物は、20周年を迎えた同好会(アルパインスケッチクラブおよびアルパインスキークラブ)による展示を予定しております。また、会場をJR品川駅に近い品川プリンスホテル・アネックスタワー5階に変え、展示、海外登山の講演会、晩餐会を同じフロアで開催できるようにしました。(詳細は10月にご案内いたします)

期日＝12月4日(土)

場所＝品川プリンスホテル・アネックスタワー5階(JR品川駅前)

番町の第32回通常総会が6月4日に開催された。この総会で、懸案であった当会の通用出入り口に雨除け通路を設置する事が承認された。

5・責任賠償保険の契約更改(宮崎)

付保対象(事業および人)基準の見直しを行ない、損保ジャパンと契約更改をした(従前は役員、評議員および支部長が対象であつ

たが、これを年間事業への参加者―前年度実績に基づく人員算定、国内に限る―に見直し、変更した)。
6・山岳4団体懇親会(宮崎)
7月9日に当会主催で開催し、16名が参加した。

7・第6回山の博覧会報告(成川)

山梨支部の第6回山の博覧会が7月10日に甲府市(山梨学院大)で盛大に開催された。山の日制定

についての主旨および現況について来場者に説明報告をし、山の日制定に向けての全国運動展開を呼び掛けた。

8・自然保護全国集会開催報告(藤本)

6月12日～14日、当会ルーム、上智大学四谷キャンパス、霞ヶ浦湖畔の土浦で開催された。

9・会員名簿(宮崎)

会員名簿は2年に1回の改訂を原則としているが、費用の観点から前回名簿作成以降の入会者については「新入会員補充版」を作成し配布するようにしたらどうかと総務委員会で検討をしている(理事會出席メンバー了解)。

10・支部長会議(宮崎)

全国支部懇談会の日程に合わせ、9月4日～5日に開催する。

11・全国支部懇談会(宮崎、酒井)

第26回全国支部懇談会は9月5日～6日に東京多摩支部主催で開催する。

12・静岡支部創立60周年記念行事(宮崎)

9月25日～26日開催の案内があった。尾上会長出席の予定。

13・新入会員オリエンテーションの開催(宮崎)

10月2日に開催する。

14・東九州支部創立50周年記念行事(宮崎)

11月6日～7日開催の案内があった。神崎副会長出席の予定。

15・上高地山岳研究所の状況(太田)

山研の水源である善六沢の大雪崩により土砂が取水区域に押し寄せ山研の水質が濁っていることは前月も報告したが、今回豪雨でさらに土石流が発生した。回復までにはかなりの日時を要する状況にある。

16・会報『山』7月号編集報告(神長)

ルーム目誌

7月

1日	学生部 システムPT スキークラブ
5日	総務委員会 スケッチクラブ
6日	図書委員会 インターネット小委員会 支部活性化PT
7日	常務理事会 集会委員会 図書管理委員会 スキークラブ
8日	海外登山基金審査委員会 山の自然学研究会
9日	休山会
12日	総務委員会 スキークラブ 海外委員会 緑爽会 スケッチクラブ 九五会
14日	理事会 会報編集委員会 山想倶楽部 山岳地理クラブ みちのり山の会 山の自然学研究会
15日	科学委員会 法人改革対応検討PT
16日	資料映像委員会 東京多摩支部
17日	SUN燦会 山の自然学研究会 東京多摩支部
20日	山岳研究所運営委員会 山の自然学研究会 フォトク

21日	ラブ 00会 資料映像委員会 東京多摩支部 三水会 つくも会
22日	山遊会
23日	山の自然学研究会 ゆきわり会
26日	フォトクラブ
27日	自然保護委員会 インターネット小委員会
28日	自然保護委員会 JACI YOUTH PT 二火会
29日	山の自然学研究会 麗山会 スキークラブ
31日	土曜会 休山会

7月来室者 638名

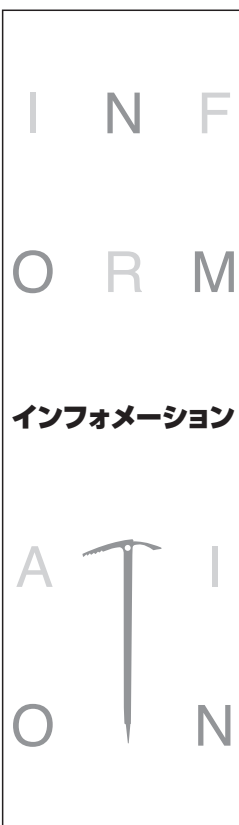
会員異動(7月)

物故

大橋克也	(2534)	10・7・13
梅棹忠夫	(3963)	10・7・3
佐野源一	(9622)	10・5・20
退会		
戸谷 翠	(9036)	
西牟田伸一	(13921)	

図書受入報告 (2010年7月)

著 者	書 名	ページ／ サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
秀山荘 (編)	辻まこと 山とスキーの広告画文集	215p / 22cm	山と溪谷社	2010	出版社寄贈
信州大山岳科学総合研究所 (編)	上高地・槍・穂高地域における自然環境の変動と保全・適正利用に関する総合研究	612p / 30cm	信州大学山岳科学総合研究所	2010	発行者寄贈
羽根田治 他	トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか——低体温症と事故の教訓	303p / 19cm	山と溪谷社	2010	出版社寄贈
宮澤美渚子	ヒマラヤ七つの峰の物語	73p / 21cm	宮澤美渚子 (私家版)	2010	著者寄贈
西本武志	十五年戦争下の登山——研究ノート	296p / 22cm	本の泉社	2010	著者寄贈
斎藤一男	山の文学散歩 (山岳文化叢書 No.6)	210p / 21cm	日本山岳文化学会	2010	発行者寄贈
日本山岳会山陰支部 (編)	玉珠峰登山 & 青海省における登山交流 玉珠峰登山隊 2009 報告書	35p / 30cm	日本山岳会山陰支部	2010	発行者寄贈
斉藤義孝 (編)	創立 50 周年 労山のあゆみ 略誌	34p / 21×30cm	日本勤労者山岳連盟	2010	発行者寄贈
日本勤労者山岳連盟 (編)	日本勤労者山岳連盟 50 周年略年表 (案) ——1960 年～2010 年	28p / 21×30cm	日本勤労者山岳連盟	2010	発行者寄贈
Himalayan Association (ed.)	Himalayan Association Journal 2008-09 (Golden Jubilee Issue)	220p / 24cm	Himalayan Association	2010	発行者寄贈
Sean Isaac (ed.)	Canadian Alpine Journal (Vol.93, 2010)	172p / 28cm	Alpine Club of Canada	2010	発行者寄贈



インフォメーション

◆創立10周年記念行事のご案内

北九州支部

記念式典および記念講演会、記念山行などを行います。

日時 10月30日(土)～31日(日)

日程 30日 記念式典、講演会、

パーティ(15時より、小倉

「アルモニーク」にて

開催)

31日 記念行事(A班 英

彦山登山、B班 関門海峡

歴史探訪)

費用 1万8000円(宿泊・パ

ーティ・記念行事)

申込・問合 9月15日までに、関

口興洋まで(〒80000

053 北九州市門司区

新原町12-27 TEL & FAX 09

3-382-16436)

*申込者に詳細を送ります

◆創立50周年記念行事のご案内

東九州支部

記念式典および記念講演会、記

念山行などを行います。

日時 11月6日(土)～7日(日)

日程 6日 記念式典および講演

会(14時より「コンパルホ

ール」にて開催。祝賀会

(18時より「大分センチュ

リーホテル」にて開催)

7日 記念山行(A班 鶴

見岳登山、B班 観光)

A・B班とも8時出発、15

時、別府駅で解散予定

費用 1万9000円(祝賀会・

宿泊・バス・保険代含む)

申込 9月30日までに、東九州支

部事務局まで(大分市府内町1

1-3020 サニースポーツ内 TEL

& FAX 097-1532-0926)

*申込者に詳細を送ります

◆紅葉の「雨飾山」に登る

集会委員会

紅葉の雨飾山と名湯小谷温泉を

楽しむ山行です。

日時 10月15日(金)～17日(日)

集合 15日17時 雨飾荘

解散 17日朝 山田旅館

費用 2万7000円(2泊3日)

定員 15名

申込 8月末までに、清登緑郎 FAX

03-1590512862

rokurou1950@mail.goo.ne.jp)

*申込者に詳細を送ります

◆「2010晩餐会展」出展作品

募集 アルパインスケッチクラブ

当クラブ創立20周年記念事業

に奮ってご参加ください。作品は、

山をテーマにした絵画で10号以下

のもの。出品料は不要です。

期日 12月4日(土)14時より

会場 晩餐会会場

申込 10月末日締切。作品搬入は

12月4日(配送は3日)

*応募要項請求は田中正雄まで

FAX 045-1788-12688

masao@tanaka.email.ne.jp)

◆講演会「小島烏水に学ぶもの」

関西支部四国同好会

日本に近代アルピニズムを広め

た小島烏水について、烏水研究の

第一人者・近藤信行氏を四国にお

招きして学びたいと思います。

日時 10月17日(日)14時より

講師 作家・近藤信行氏

会場 徳島県立文化の森「21世紀

館」TEL 088-668-1

111)

■同時イベント「小島烏水ゆかり

の高松市散策」近藤氏同行

日時 10月18日(月)

問合 尾野益大 TEL 090-71

45-11893 FAX 088-1

625-16215

mpo-turugi@mc.pikara.ne.jp)

*どちらも参加費無料

◆菅沼満子「山の絵本」展

水彩で描かれた山の絵など約1

00点。絵本の原画も展示。

会期 10月8日(金)～11月7日(日)

(10時～16時、火・水休館)

場所 日野春アルプ美術館(北杜

市長坂町長坂下条134

212 TEL 055-11321

6325)

入館料 500円

日本山岳会会報 山 783号

2010年(平成22年)8月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイッツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上昇

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社